※令和４年度以降入学生用

学校番号	２０１

令和８年度　地理歴史科

教科	地理歴史	科目	世界史探究	単位数	３単位	年次	２年次
使用教科書	「世界史探究　新世界史」（山川出版社）						
副教材等	「最新世界史図説タペストリー二十四訂版」（帝国書院） 「新世界史要点ノート　応用編 2026」（啓隆社）						

1　担当者からのメッセージ（学習方法等）

・世界史探究は、語句や年号の暗記で終わらせる科目ではありません。どんな歴史的出来事にも、その背景には色々な人々の営みがあります。教科書数行の出来事の裏に、なぜそのような事象が起こったのか、そしてそこにかかわる人々の選択や葛藤があることに思いを馳せながら、理解を深めてください。
・勉強法の前提としてですが、入念な予習と、授業にしっかり集中して臨むことがまず肝心です。授業の内容をその時間でしっかり理解すれば、復習に多くの時間を割く必要はありません。その為にも、予習する時間を大事にしましょう。そのうえで、わからない部分があれば、授業中であっても担当者に質問してください。
・日々の予習の仕方ですが、教科書を読んで全体の流れを押さえましょう。語句を確認し、問いを持ちながら授業に臨めるよう、予習してください。
・日々の復習の仕方ですが、どのような意図や狙いの授業・取り組みに参加していたか、自分はどんなことを考えていたかを思い出すようにしましょう。語句や説明を再暗記することに時間をかける傾向がありますが、自分の学び方を振り返り、改善していく時間にしましょう。

2　学習の到達目標

(1) 世界の歴史への興味・関心を高め、歴史総合で続けてきた地理的条件や日本の歴史の知識とも関連付けながら理解していきます。
(2) 社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ判断力を身につけていきます。
また、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きるための歴史的思考力を培います。
(3) 歴史に関する資料を適切に調べてまとめ、資料に基づいて考察した結果を適切に表現したり、議論したりする力を身につけます。
(4) 文化の多様性と現代世界の特質を多角的かつ広い視野から考察し、現代社会が直面する諸課題について、歴史的観点から考察し、主体的な追究を通して認識を深めます。

※令和４年度以降入学生用

３　評価の観点及びその趣旨

観点	a:知識・技能	b:思考・判断・表現	c:主体的に学習に取り組む態度
観点の趣旨	・世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解している。 ・諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けている。	・世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる事象の意味や意義、特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現代世界とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察している。 ・歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明し、それらを基に議論したりする力を培う。	・世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に探究しようとする。 ・多面的・多角的な考察や深い理解を通して日本または他国の歴史・文化を尊重することの大切さについての自覚などを深めている。
評価方法	・定期考査 ・小テスト ・要点ノートおよび板書ノート、プリント	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り
上に示す観点に基づいて、学習のまとまりごとに評価し、学年末に５段階の評定にまとめます。学習内容に応じて、それぞれの観点を適切に配分し、評価します。			

※令和４年度以降入学生用

４　学習の活動

学期	単元名	学習内容	単元(題材)の評価規準	評価方法		
				知(a)	思(b)	主(c)
一学期	第１章　人類の歴史と私たち	「地球環境からみる人類の歴史」「日常生活からみる世界の歴史」①人類の歴史を地球の形成や生命の誕生という長い変化の過程に位置づけ、地球の歴史における人類の歴史の位置と人類の特性に気づく。②人類は自然環境に制約を受けながらも、進化の過程で環境に適応する手段や能力を獲得して生き残ってきたことを、地球物理学、生物学、人類学、考古学などの成果も取り入れて理解する。	a：人類の歴史と地球上の生命の歴史の俯瞰、一方で人類は多くの道具や技術を生み出し、普及させてきたことを理解し、整理できる。 b：人類の歴史は単線的ではなく、いくつかの可能性があったなかで、環境に適応できた種のみが生き残ってきたことを考察している。世界商品を通じ、生産した人々、消費する人々、その利益を得た人々を考察している。 c：文明以前の人類の歴史を、歴史学以外の分野の理論や成果も活用しながら多面的に追究しようとしている。人々の生活に潤いをもたらす世界商品の生産・流通・販売について、その問題点と解決のための視点を探究しようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・演習ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り
	第２章　古代文明の特質	「文明の誕生」①食料生産の開始が人類の技術、活動を変化させ、定住、そして都市の出現が国家の誕生につながったことを理解する。②人類の、各地域に適応した身体的特徴や習慣による区分とその不確実性に気づく。「古代オリエント」「古代の南アジア・オセアニア・東南アジア」「古代の東アジア」「アフリカと南北アメリカ」各地域の地理的特質を理解し、それぞれで形成された古代国家の生活・文化・社会について理解する。	a：諸地域の古代文明・古代国家・古代帝国の出現、できごとについて年表や資料を適切に活用し、諸地域の多様性や形成された特質を理解させる。 b：諸地域の古代帝国が、どのように他地域の人々を統治したのか、統治下ではどのような政治的・経済的・文化的変化がおきたのかを考察している。 c：古代帝国の強力な支配について、その問題点とその後の世界、他地域への影響を多面的に探究しようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・演習ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り
	第３章　アジア諸地域の国家と社会	「中国帝政国家の形成」 「北方ユーラシアの動向」 「分裂と融合の時代」 「隋唐帝国とアジア」 東アジアの自然と文化から殷周王朝と秦漢帝国の成立までの東アジアの文化・宗教の原型、儒教思想や社会秩序が周辺地域にまで大きな影響を与えたこと、皇帝政治の内政・外交の特徴を理解する。東アジアに特有の国際関係が形成されたことを理解する。 隋唐帝国が遊牧国家や西アジアとの関係を理解する。南アジアでは、仏教が古代統一国家の形成に影響を与えたことやヒンドゥー教にもとづいた社会構造が形成されたこと。東南アジアでは、７世紀以降に海上交易の拡大にともなって、現在まで続く人々のまとまりや特徴ある文化が形成されていったことを理解する。	a:のちの中華帝国の原型となる秦漢帝国で形成された華夷思想、儒学と政治、歴史書の編纂の基本知識、華北への遊牧民の進出で新しい制度を中国社会に定着させるなど律令制度や唐の広域支配の内容、隋唐文化や唐代後半の制度改革についてなど、理解し整理できる。 b:皇帝、儒学、歴史など中国文明の重要な要素が出現した意義、また隣接諸国家が唐帝国の政治制度や文化を取り入れて国家体制を整備することで東アジア文化圏が形成されたこと、唐帝国の国家体制が８世紀以降、変化していく背景をコラムや資料を利用し考察している。 c：秦漢帝国の成立以来、中国帝政が２千年以上も続いた背景・理由を探究しようとしていることや、遊牧国家と農耕国家は歴史上どのような関係性にあったのかを探究しようとしているなど、広い視野に立って現代の背景を考えようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・演習ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り

※令和４年度以降入学生用

一学期	第4章　西アジアの帝国と古代ギリシア	「古代西アジアの帝国」 「古代ギリシア」 「ヘレニズム時代」 民族の興亡が繰り返された西アジア、地中海東部にみられる地理的特質を理解し、イラン系の人々が安定した政治体制と諸地域との交流を背景とした文化をつくり上げたこと、ギリシアの特有のポリス社会と独自の政治体制が形成され、またその文化がこれらを基盤とした人間中心の合理的性格をもつ文化であったことを理解する。	a:西アジア世界は東西交易・文化の交流地域としての役割を果たしていたこと、古代ギリシア人の経済活動と政治活動について、ポリス社会の視点からの特徴と、対外戦争と内戦を経験により、ポリス社会や政治体制におきた変化など、影響や変化を理解し整理できる。 b:ペルシア王朝が、長期間にわたって存続したこと、この地で生まれた宗教がその後、世界各地に影響を与えたこと、古代ギリシアで民主政治が生まれ、それが衆愚政治への変化の背景を考察している。 c: 伝統的イラン文化が、東西交易を通じた文化交流によって、東アジア世界の文化に影響を与えたことなど、他の地域や後世の歴史に与えた影響を探究しようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・演習ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り
	第5章　古代ローマ	「ローマの発展と帝国形成」 「ローマ帝国の繁栄とキリスト教」 「ローマ帝国の衰退」 都市国家から共和政の体制を整備し、平民主体の軍隊による征服戦争によって、地中海に広がる大帝国に成長したこと、平民が獲得した権利、共和政への関わり方、その没落を理解する。地中海を中心にローマ風の世界が広がり、周辺にいた他の民族もローマ化していったこと、また伝統的信仰からキリスト教にかわっていったことを理解する。広大な帝国領が内乱をまねき、終息後皇帝は共和政の伝統を放棄して新しい独裁体制を構築し、その権力強化にキリスト教を利用したことを理解する。	a:都市国家から帝国へと変化していくなかで、平民や貴族のおかれた環境を理解し、貴族が内乱をおこした背景を理解している。ギリシア文化の模倣から始まったローマ文化が独自に発達したことや、キリスト教が迫害を受けながらも受け入れられたこと、ローマ皇帝がキリスト教保護に方針を転換し、教義形成を主導したことを理解している。 b: ・ローマの共和政が、貴族政下で平民の政治的権利を認めることで発展し、帝国へと拡大できたことを考察している。共和政の原則を維持したまま帝国が形成された経緯と限界を考察している。 c:ローマの貴族政、民主政、独裁政を融合した独特の支配体制を構築できた理由を探究しようとしている。ローマ文化やキリスト教がローマ世界をこえる普遍性をもった理由を探究しようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・演習ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り

※　表中の観点について　a:知識・技能　b:思考・判断・表現　c:主体的に学習に取り組む態度

二学期	第6章　ヨーロッパの形成とイスラーム教の誕生	「古代から中世へ」 「カール大帝とヨーロッパ」 「イスラーム教の誕生とカリフの政権」 ヨーロッパの地理的特徴と歴史への影響について理解する。西ヨーロッパにおけるゲルマン部族諸王権とカトリックの関係の開始について、６世紀の東ローマ帝国の拡大について、フランク王国後の新しい枠組みの形成、ノルマン人の移動と影響、東ヨーロッパにおける民族分布の成立について整理して理解する。イスラーム教の創始とウンマの発展、カリフ制の開始、征服活動について整理する。イスラーム文化が西アジアの伝統文化、ギリシアやインドなどの伝統文化との融合によって発達したことに注目する。	a:ヨーロッパの南北が地理的に異なっていることについて理解している。ビザンツ皇帝と教皇の対立が深まるのと並行して、教皇と王家が関係を強めたこと、フランク王国分裂の経緯と、ノルマン人らの移動が分裂後の各王国にどのような影響を与えたのかなど、理解している。 b:フランク王国が長期に存続できた理由について、古代ローマ帝国の再興の視点、ギリシア的要素が濃くなり、ビザンツ帝国に移行したことについてなど、多角的俯瞰的に考察している。キリスト教を基盤とする西欧世界の形成に対し、ムスリム勢力の地中海進出がどのように影響したのかなど広域に考察している。 c:ヨーロッパの東西それぞれでの古代との連続性や断絶について、現代におけるイスラーム教の重要性を意識しながらその起源や発展についてなど、探究しようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・演習ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り

※令和４年度以降入学生用

二学期	第7章　結びつくユーラシアの諸地域	「イスラーム教とムスリム政権の広がり」 「宋と周辺諸国」 「モンゴル帝国」 ユーラシアの中央では広大な領域を支配する帝国の興亡が繰り返され、そのなかで多彩なエスニシティが共存していたこと、一方ユーラシア西方にあった王国のなかで、フランスとイングランドには中央集権の動きがみられたことを理解する。 アジア産の奢侈品に対するヨーロッパの需要は、新大陸からもたらされた銀を媒介として活発な東西交易を引き起こしたことを理解する。	a:遊牧を生業としていたトルコ系民族が軍事力として重用され、勢力を拡大したことや、哲学、医学、歴史学などの各分野で多くのイスラーム文化人が活躍したことなどを理解している。 b:10 世紀以降多くの北方民族の興亡が繰り返されたこと、宋における新たな社会層や宋学の役割など周辺国家と中国国内の変化を考察している。 c:各民族の特徴をつかむことで、漢民族中心の東アジア史とは異なる状況を追究しようとしていたり、地域経済や庶民文化がめばえ、中国社会の基礎が形づくられたことを追究しようとしていたり、広い視点、深い理解を意識している。	・定期考査 ・小テスト ・演習ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り
	第8章キリスト教ヨーロッパの成熟と交流	「教皇権の確立と十字軍」 「ヨーロッパの膨張と成熟」 「ヨーロッパの危機と再生」 神聖ローマ帝国の成立過程について確認する。キリスト教的統治理念にもとづく多数の君主国が成立したことと、ビザンツ帝国が最盛期を迎えたことを理解する。教皇座の改革が進展すると皇帝権とのあいだに叙任権闘争がおこり対立が続いたこと、十字軍の開始、イタリア諸都市の地中海の軍事的、商業的主導権の掌握、中世身分制社会が発達など、様々な動きを理解する。また中世後期の教会権威の動揺や社会秩序の崩壊「全般的危機」の状況とそれに対応すべく新たな動きが始まっていたことを理解する。	a:カール大帝の戴冠とオットー１世の戴冠事例と比較しつつその理由について、神聖ローマ帝国の教会政策と11世紀の教皇座の改革の２つがどの点で衝突するのか、十字軍の開始についてなどこの時代に起こる事象の背景や理由を多角的に理解している。 b: ヨーロッパ各地における植民活動の原因や植民事業のおこなわれ方、十字軍運動でのこの時期のイタリア諸都市をめぐる諸問題についてなど、多面的に考察している。 c: 当時のヨーロッパ諸国のあり方がどのように近代国家に結びつくのかについて、ルネサンスの諸成果について当時のさまざまな状況と結びつけて探究しようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・演習ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り
	第9章　交易の進展と東アジア・東南アジア	「東西交流の動向」 「明代の朝貢世界」 「大交易時代の東アジア・東南アジア」草原の道は騎馬遊牧民により開かれ、トルコ系民族の活躍が著しかったこと、オアシスの道においては古くから中国との交易が活発であったこと、海の道は 15 世紀以降の「大航海時代」へと継承されたことを理解する。14 世紀北半球の異常気象は明朝の成立、鎌倉幕府倒壊、朝鮮王朝の建国など大きな政治的変動をもたらしたこと、明朝は民衆の直接支配と朝貢体制を確立しようとしたこと、さらに周辺ではマラッカ、琉球などが中継貿易により繁栄したことを理解する。16 世紀に銀の流通が盛んとなりポルトガル人の参入などで交易が発展すると朝貢体制は変質をとげた一方で、モンゴル勢力や倭寇の活動が活発化したことを理解する。	a: 草原の道がモンゴル高原から黒海北岸に達していたこと、オアシスの道は山岳地帯や砂漠地帯を迂回していたこと、銀が経済の中心となり、日本銀の需要の高まりがポルトガル人の活動を活発させたことなどを理解している。 b: 内陸の通商路ではイラン系やトルコ系の民族が活躍したこと、海上の通商路ではギリシア人やアジアの民族、ムスリム商人やイタリア人などが活躍したことを考察している。一方で明では海禁政策がおこなわれたこと、現物中心の経済が銀を基盤とした経済へ変化したことを考察している。 c: 内陸交易において中心となった物産とその主産地について、海上交易において中心となった物産とその主産地についてなど、追究しようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・演習ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り

※　表中の観点について　a:知識・技能　b:思考・判断・表現　c:主体的に学習に取り組む態度

※令和４年度以降入学生用

三学期	第１０章　アジア諸地域の再編	「オスマン朝」「サファヴィー朝とムガル朝」「清朝支配の拡大」「清朝の近隣諸地域」 オスマン朝支配下には多様なエスニシティの民族がいたが、柔軟な統治体制と官僚制を整備することでこれに対応したこと、サファヴィー朝は、まずトルコ系遊牧民が中心となっていたが、17 世紀にシーア派を中心とする新しい体制へ変貌をとげたこと、ムガル朝は支配下に多くの非ムスリムを抱えていたこと、その対応に様々な工夫を凝らしたことなどを理解する。清朝の皇帝は支配下の各民族に対し多様な権威を示すことで統治を安定させたこと、清朝の領域は直轄領、藩部、朝貢国にわかれていたこと、朝貢貿易は重視せず、民間人による自由な取引を認めていたことを理解する。	a: オスマン朝は直轄領と間接統治領において異なった支配をおこなうことで安定をはかっていたこと、ムガル朝ではヒンドゥー教徒に対してアクバル帝が融和策を講じたことを理解している。乾隆帝の治世にかけて新大陸の作物導入により国内の人口が増加し辺境の開発が進んだことなどを理解している。 b: 非ムスリムに対し共同体の設置とジズヤ納入などにより信仰を許したこと、サファヴィー朝によるイランのシーア派化を現在につなげて考察している。朝鮮は清朝に対しなぜ「小中華」の意識をもっていたかについて考察している。 c: イスラームの影響により新しいヒンドゥー教（シク教）が生まれた経緯を追究しようとしている。清朝は華夷一体を掲げ、柔軟な統治を実現したことを追究しようとしている。人口増加は環境破壊をまねき、生活苦におちいった民衆の反乱がおこったことを追究しようとしている。	・定期考査 ・小テスト ・演習ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り
	第１１章　ヨーロッパの成長と世界の一体化	「ヨーロッパ人の海洋進出」「世界の一体化とその進展」「近世の始まり」「宗教改革」「主権国家体制の成立」「オランダの覇権から英･仏の抗争へ」「北・東ヨーロッパの動向」「近世ヨーロッパの思想と社会」 15 世紀からのヨーロッパ人の海洋進出の背景や要因について、とくに、ポルトガルとスペインがなぜその動きを先導したのかについて深く探究する。ヨーロッパ人のアジア各地への進出の実態について、アメリカ植民地化と比較しつつ把握する。ヨーロッパの経済が 16 世紀に成長、17 世紀に停滞、18 世紀に再成長という循環をなしていたことをおさえつつその要因、さらにそのなかで地域間分業が進展し、農場領主制が成立したなどのことにも着目する。ヨーロッパ史における 16～18 世紀の独自性について、それ以前の中世や工業化以後の近代との比較のなかで概略的に理解する。主権国家体制の意味、この体制が現代の国際社会の基礎となっていることを意識し、主権国家の基本的形態について理解し、その典型としての絶対王政の特徴について専制君主制との相違を意識づける。16 世紀以降の自然科学の発達を科学革命としてとらえつつ、その影響を受けて合理主義や経験主義の思想が発達したことを理解する。	a: ポルトガルが設置した航路上の交易拠点について、ポルトガルにとってのその地域の役割も含めて理解している。ポルトガルやオランダなどのアジアへの進出が政治的支配をともなわなかったことについて理解している。カルヴァン派の予定説を取り上げ、これが商人や手工業者による富の獲得を正当化したことについて理解する。対抗宗教改革の内容について、15 世紀のカトリック教会の姿勢からの変化に着目しつつ理解している。 b: この時代が中世はもちろん、19 世紀以降の近代とはなぜ区別すべきなのかについて考察している。軍事革命の進展がどのように近代国家の形成、発達を促進したのかについて考察している。主権国家の発達の理由として、16 世紀以降のヨーロッパ諸国で君主権力がどのように伸張したのかについて考察している。 c: この時期の科学や技術が現代の生活にどのように結びついているのかについて探究しようとしている。現代国際社会の成立と発展の歴史について考える際に、後期ローマ帝国時代までさかのぼりうることを理解したうえで追究している。	・定期考査 ・小テスト ・演習ノート	・定期考査 ・小テスト ・考察内容	・活動参加状況 ・自学自習課題 ・発表内容 ・振り返り

これ以降は、３年次に学習

※　表中の観点について　a:知識・技能　b:思考・判断・表現　c:主体的に学習に取り組む態度